

連載 26 成瀬巳喜男『君と別れて』 煙突とガスタンクを背景にした芸者たちの哀歓

成瀬^{みきお}巳喜男（1905 - 1969）は、長い下積み生活のあと1932年の『蝕める春』でキネマ旬報ベストテン第六位に選ばれ、翌1933年には『君と別れて』『夜ごとの夢』を発表した。サイレント、モノクロの美しい映画である。

『君と別れて』は、子持ち芸者の菊江（吉川満子）と、家族のために芸者稼業に売られた妹芸者・照菊（水久保澄子）との、芸者という派手な仕事の裏側の日常が丁寧に描かれた佳品である。白髪を気にする年増の芸者に対して対照的に娘々したういういしさ、水久保澄子の大きな瞳が魅力的だ。普段着の首巻も愛らしい。菊江の旦那は、照菊に乗り換えようとしている。嫌な男である。芸者という母親の仕事を嫌う学生の息子は、ぐれかけている。照菊は、姉のようなほのかな愛情を彼に寄せて更生させようとする。

煙突が立ち並び、ガスタンクが見え、川が流れる下町を背景に、身の上話や相談事を交わす芸者たち。その立ち居振る舞いが胸に沁みる。

北川冬彦は「題材の古さにもかゝらず技術が大へん新しい」（『キネマ旬報』1933年4月11日）と書いた。「いままでのこの種の映画では、その背景は、凡そ浮薄な、銀座的、新橋的なもので、すぐにネオンサインや何か出てくるのであるが、この映画はさうではなく、シャツや何んかの洗濯物のブラ下つてゐるアパート、街に立てば、その向ふには、煙をなびかせてゐる煙突の林、ガスタンク」と数え上げて、小津安二郎映画と並べて論じている。成瀬作品の秘密に分け入る読解である。



水久保澄子（『非常線の女』1933年出演時）



『君と別れて』1933年より
右・菊江（吉川満子）、左・照菊（水久保澄子）

芹島瑛二は「背景。勿論あのガスタンクの見え煙突の林立、汚い水のよどむ橋の所はすぐれたものであったがセットに於ての小道具の扱ひ方の唯ならぬ事」（『キネマ旬報』1933年5月11日）と、感嘆した。

翌1934年3月1日号『キネマ旬報』「昭和八年度・優秀映画」特集では、例えば飯田心美が邦画の一位に小津安二郎「出来ごろ」、二位に「君と別れて」、三位に溝口健二の「瀧の白糸」をあげている。日本映画のサイレント期最後の、そして文句なしの黄金時代だったのである。

同特集で、寺崎廣載は、「豊かな現実観、発展性のある新鮮な表現（略）センチメンタルな花柳生活ではあるが、それを裏付ける生活の影が色濃く現はれてゐる点、その勝れた技術と共に得難い作品である」とコメントをつけた。相川楠彦は「蒲田映画に一つの新生面を拓いた」と付言し、岸松雄は、「リアリズムの道を進み乍ら、しかもそこにリリカルな余韻を豊かに溢へてゐる成瀬巳喜男の優しさを忘れることが出来ない」と述べ、杉本俊一は「なんでもないやうな材料をこれほどまでに生かしきつたシネアスト成瀬巳喜男は非凡な映画作家であると同時に偉大なる批評家であるとも云へませう」と称賛した。

この映画のリリカルな要素を体現するのが松竹楽劇部出身の水久保澄子だといっても過言ではない。成瀬の出世作『蝕める春』でも妹娘を演じ活躍した。だが彼女は、その後、突然の自殺未遂事件、移籍、撮影中

の駆け落ち同然の国際結婚（相手はフィリピン人）とスキャンダルが相次ぎ、当時籍を置いた日活から解雇を申し渡される。結婚は騙されたもので、帰国したが仕事はなく、ダンスホールではたらいたとか、満洲に渡ったとか、上海に流れて行ったとか、噂にはのぼったがその実態は詳らかではない。没年さえ明らかではない。そのせつない挿話も合わせて、『君と別れて』は忘れがたい。